楊　韜　著

近代中國における知識人・メディア・ナショナリズム

――鄒韜奮と生活書店をめぐって――

岩　間　一　弘

一

本書は、一九三〇～四〇年代の中國（とくに上海）で活躍したジャーナリスト・鄒韜奮と、鄒が設立して民國期に最多の發行部數を記錄した雜誌『生活』を出版した生活書店に關する日本で最初の研究書である。本書は、近代中國における知識人・メディア・ナショナリズムの三者關係や言論的公共性を考察しながら、鄒韜奮および生活書店を中國ジャーナリズム史の系譜に位置づけようと試みている。本書の目次は次の通りである。

前書き　「中國の近代性」にかかわるいくつかの問題
第一部　導入篇
序章　生活書店及び鄒韜奮研究

第一章　近代中國（上海）のジャーナリズム環境
第二部　人物篇
第二章　ジャーナリスト鄒韜奮の發展
第三章　戰時中國における鄒韜奮の政治活動
第四章　生活書店の人々
第三部　書店篇
第五章　生活書店の募金活動
第六章　戰時下の經營管理
第四部　言說篇
第七章　メディア化された共同體
第八章　事例分析：投書欄における「戀愛と貞操」をめぐる論爭
第九章　新生事件から見る日中メディア間の對抗
第十章　「國貨」をめぐる言說の浸透性檢證
終章　生活書店から三聯書店、そして再び生活書店へ
附錄（史料抄錄）

今後は鄒韜奮と生活書店に關して、日本ではまずこの書物が參照されることになると思われるので、きわめて貴重な總合的研究といえる。以下では、若干の所感も交えつつ、各章の內容を簡潔に紹介したい。

第一部「導入篇」の序章「生活書店及び鄒韜奮研究」では、本書の一次資料・先行研究と視座・全體構成が紹介されて

いる。とくに印象的なのは、日本語・中國語に限らず英語・韓國語による研究も周到に參照されている點である。先行研究において、思想史では、鄒韜奮がブルジョアジー思想から脱却した後でプロレタリアートの立場に轉じた知識人の典型とされ、とくに一九三一年の滿洲事變が轉換點とされる。また、抗日戰爭史では、生活書店による抗日言論の影響が論じられ、都市史では、『生活』などの出版物が生活文化研究の豐富なソースになっている。それらの先行研究に對して本書は、鄒韜奮だけでなくその周邊人物にも焦點をあてて、生活書店の經營においては「合作社」という性質に着目し、史料面では國民黨機關紙『中央日報』や國民黨の內部資料にも目を配ることが强調されている。

第一章「近代中國（上海）のジャーナリズム環境」では、近代上海における中國語・英語・日本語メディアの中心地として、それぞれ望平街（ロンドンのフリート・ストリートに喩えられる）・バンド・虹口に着目する。また、アメリカのジャーナリズム理論が、松本君平著『新聞學』（一八九九年）などによって日本經由で中國に輸入されたこと、さらに中國のジャーナリズム教育におけるミズーリ大學の影響力の大きさなどを指摘して、上海のメディア空間の「雜種性」を論じている。本章が示す「メディア地圖」は、上海史の理解にも役立つ興味深いものである。

第二部「人物篇」の第二章「ジャーナリスト鄒韜奮の發展」は、本書にとって中心的な章である。評者がとくに重要だと思ったのは、鄒韜奮が、一九一九～二一年に中國に滯在して五四運動前後の中國で廣く知られた哲學者ジョン・デューイの影響を强く受けていたことが說得的に論證されている點である。鄒韜奮は胡適や陶行知を通じてデューイ思想を學び、一九一九～二五年にかけて翻譯したデューイの『民主主義と教育』は、鄒韜奮が「愛國的民主主義ジャーナリスト」になる原點であるという。すなわち、鄒韜奮の『生活』を始めとする「平民風」の雜誌作りは、デューイの「平民教育」思想の影響を受けたものであり、デューイのプラグマティズムの實用化であった。さらに『生活』誌上で投書欄「讀者信箱（讀者ポスト）」が生まれたのは、鄒韜奮が讀者という公衆による公共の議論の場を作り上げようとしたからであり、つまりデューイが提起していた「大社會（Great Society）」から「大共同體（Great Community）」への轉換を實現しようとして

いたからだと考えられる。ほかにも、鄒韜奮は一九三三年～三五年にかけて歐米各國に滯在し、とりわけロンドン大學の政治學者ハロルド・ラスキの言論などに注目しながら、歐米諸國とソ聯の民主主義を比較して、それらをいかに中國に應用すべきか考えていたという。

第三章「戰時中國における鄒韜奮の政治活動」は、鄒韜奮の短いながらも本格的な政治活動を行った期間を多様な視點から論じていて興味深い。鄒韜奮は國民黨政權のヘゲモニーを認め、共產黨の武力鬪爭による階級解放には反對であり、抗日戰爭期には黨派の區別よりも統一戰線の形成こそが第一の任務と考え、自身は特定組織に屬さない無黨無派の言論人であると表明し續けていた。一九三六年に國民政府によって國民參政員として招聘されると、おもに言論出版に關する提案を數多く出し、國民參政會で採擇されたものの、實施に移されることはほとんどなかった。一九四〇年代以降に國民黨政權が生活書店を破壞しようとしたのは、その全國各地の支店が共產黨八路軍の聯絡據點になっていると疑ったからであるが、おそらく生活書店と共產黨に組織的な關係はなかった。しかし、胡愈之に代表されるように、生活書店內部には共產黨の「地下黨員」が入っており、その影響力は大きかった。また共產黨南方局の周恩來も、鄒韜奮と彼の經營する生活書店に常に關心を拂っていた。

第四章「生活書店の人々」は、四人の生活書店關係者を取り上げる。生活書店の前身は黃炎培の主宰する中華職業教育社の內部機關であったので、鄒韜奮ら生活書店の主要幹部はみな中華職業教育社の社員でもあり、黃炎培は生活書店の經營管理などについて具體的な提案を出していた。一九三三年末に『生活』が發禁になり鄒韜奮が海外亡命すると、杜重遠が、民間實業家の身分で國民黨政府主管部門に登錄し、雜誌『新生』を創刊した。胡愈之は、一九三三年に中國共產黨に入黨した「地下黨員」で、生活書店でも一九三八年までは正式な職務を擔當しなかったが、その舞臺裏では指揮者的な役割を果たし、鄒韜奮の思想的な「左傾」にも影響を與えていた。徐伯昕は、『生活』の誌面に多くの廣告をとってきて、さらに彼自身が廣告作品を手掛けるなど、生活書店に實務面で貢獻した。

第三部「書店篇」の第五章「生活書店の募金活動」は、菊池一隆が指摘した生活書店の經營の合作社的な性格について、滿洲事變後の東北義勇軍（馬占山）支援のための募金活動を例として論じる。獻金者は一般個人、民間企業・團體、各種學校、地方政府・機關など廣範圍に及んだが、生活書店が大規模で長期間の募金活動に成功したのは、地方では入手しにくい新聞・雜誌・新刊書などを購入して郵送する「書報代辦部」のノウハウが繼承されるなど、讀者との強い絆によって築き上げた聯携型の經營方式があり、さらに會計士による明白な資金管理システムもあったからだと分析されている。

第六章「戰時下の經營管理」は、生活書店の內部機關誌『店務通訊』を一次資料として、一九三七年以降の生産コストの抑制、流通手段の確保、空襲對策、不正事件などについて論じている。上海の租界や英領香港では、外國から安値で印刷用紙を輸入して生産コストが抑えられたが、對照的に重慶や成都などの「大後方」では高騰した。廣州と武漢の陥落後には雜誌の郵送も困難となり、一九三九年以降には郵送料金も上昇した。都市住民の疎開によって農村地域でも文化需要が高まり、生活書店は各地に支店を開いたが、日本軍の空爆によって損壞した支店が多かった。そのため四川省では「流動供給隊」を設けたり、倉庫を郊外に分散したりもした。

第四部「言說篇」の第七章「メディア化された共同體」は、生活書店の雜誌投書欄において讀者・投稿者・編集者の間にどのようなコミュニケーションが行われていたのかを全面的に檢討しており、本書の最も獨創的な章である。讀者投書欄は、讀者からの手紙によって一九二六年一〇月の『生活』から始まった。『生活』の投書欄の讀者は上海を中心とした大都市の人々であったが、一九三七年以降の讀者層は地域的・社會階層的に擴大した。『生活』の投書欄は、おもに家庭生活、男女關係、戀愛と結婚など、讀者の日常生活や一般的な社會問題に關する記事がほとんどだったが、その後の『新生』『生活星期刊』『抗戰』『大衆生活』などの投書欄は、戰爭期の內政、軍事政策に對する意見や主張、戰爭に關する個人的感情などを取り扱った。こうした投書欄においては、年齡や職業の異なる多様な個人が互いに情報を提供したり、相互に議論したりする誌上のコミュニティが生まれたが、それはベネディクト・アンダーソンのいう「想像される共同體」

とは異なって、關係者がより能動的に參加するものであったといえる。

第八章「事例分析：投書欄における「戀愛と貞操」をめぐる論爭」は、一九三三年に『生活』の投書欄で展開された「戀愛と貞操」をめぐる論爭を考察した。同論爭は、一九一八年に『新青年』、一九二五年に『婦女雜誌』『現代評論』でも起こっていたが、これらの參加者が知識人に限られていたのに對して、『生活』ではより多くの一般讀者が參加できた。鄒韜奮が編者として意見を發表したのは最後の一回だけであり、それ以外は代表的な論客の周建人と讀者ないしは讀者間の議論の調整役に徹していた。それゆえ『生活』投書欄では、より多くの一般人の發言、そして高名な學者と一般人の意見の交戰が目立った。ただし、當時は「救國」「抗日」の言説が盛んになってきていたので、「戀愛論爭不要」のような意見もあった。本章は「戀愛と貞操」論爭を通して、『生活』投書欄の「誌上コミュニティ」を具體的に描き出すことに成功している。

第九章「新生事件から見る日中メディア間の對抗」は、一九三五年に上海で起こった言論彈壓事件である「新生事件」が日中兩國でどのように報道されたのかを分析した。「新生事件」とは、『生活』の後繼誌『新生』が掲載した記事「閑話皇帝」に關して、天津・上海の日本總領事が日本の天皇に對して不敬であると抗議し、それを轉載した上海の『新生』および天津の小型新聞『大報』が廢刊に追い込まれた事件である。この事件に關して、『東京朝日新聞』は、中國政府および上海市が日本政府の抗議と要求を全面的に飲み込んだ點を中心に報じ、强い日本政府を日本國民に印象づけようとしていた。一方、上海の『申報』は、「不敬」の理由の究明と不當判決に對する中國國內の批判を重點的に報じ、中國國民の反日感情を維持・昂揚させようとしていた。さらに著者は、この「新生事件」を中國・日本雙方のジャーナリズムのあり方を變えたターニング・ポイントであると考えている。すなわち、日本政府は、天皇の萬能無制限の統治權力を否定する「天皇機關說」を取り除く國體明徵運動を推進するために「新生事件」を利用し、これ以後は右翼や軍部が日本の世論の主導權を握るようになった。一方、國民政府は日本の壓力を利用して、國內の言論・報道に對する統制を强化したという。

このような本章の結論は假説段階にあり、少なくとも「新生事件」に對する國民政府の對應策が行政・外交文書といった一次史料の發掘・精査によって實證される必要があることはいうまでもないが、日中兩國の世論のコントラストを鮮やかに浮き彫りにした點に本章の意義がある。

第十章「「國貨」をめぐる言説の浸透性檢證」は、『生活』における「國貨」（國産品＝中國製品）をめぐる言説と表象について考察した。例えば『生活』（一九二七年八月二一日）は、「帝國主義を打倒しよう」と訴えつつ全身に「洋貨」（舶來品）をまとう上海のモダンガールを批判する投書に對して、編者が「歐化」には反對しないが自力で「歐化」のモノを生産するように提唱している。滿洲事變の起こった一九三一年には「國貨」に關する記事が增えたが、翌年以降には再び減少した。「國貨」に關する投書が他の話題に比べて少なかったのは、一般民衆が「國貨」と「洋貨」を區別するのが難しかったからである。さらに「國貨」の廣告にさえも外國製品への憧れの心情が見られていた。メディアに氾濫する「國貨」運動を推進する言説に、その受け手である市民が踊らされていたわけではなく、著者はそこにナショナリズムの複雜性・多樣性を見出している。

終章「生活書店から三聯書店、そして再び生活書店へ」は、本書全體の要點と生活書店のその後について簡潔に述べられている。生活書店・讀書出版社・新知書店の三社は一九四〇年からそれぞれ人員を派遣して革命根據地に書店・出版社・文房具店を共同で開き、それらは周恩來や共産黨地下黨員の指導を受けていた。この三社は一九四五年一〇月に「重慶三聯書店」を開店し、一九四八年には合併して、香港でも三聯書店が開かれた。同じ頃、東北や華北でも次々に三聯書店が設けられて樣々な店名が附けられ、一九四九年八月には「生活・讀書・新知三聯書店」に名稱が統一されたが、一九五一年、三聯書店は人民出版社に吸收されて、正式に業務終了を告げた。しかし、二〇一三年に生活書店は再び獨立して營業を始めた。

二

以上で見たように、本書は鄒韜奮と生活書店をめぐる多様な論點を網羅しており、優れた總合的な研究書になっている。とくに印象的なのは、本書が歐米や日本の研究成果をよく消化して議論を展開している點である。中國から日本にやってくる留學生のなかには、ときとして中國で學んだこと、あるいは中國でも學べることを日本語でアウトプットしているだけのような狀況に陷り、日本の學術的成果を十分に吸收しきれていないこともある。しかし、本書を一讀すれば、著者の楊韜氏が日本の學界でひたむきに多くのことを學ばれて自分のものとされてきたことがわかり、その眞摯な姿勢は歐米滯在中に翻譯などを通して歐米思想の吸收に努めた鄒韜奮にも重なるものがあるだろう。

評者は以前に東京のある學會で、當時大學院生だった楊韜氏の研究發表のコメンテーターを務めさせていただいたことがあった。そのときの報告は『生活』の投書欄に關するもので、本書第七章のもととなる內容であった。當時は中國史の分野でまだ「公共性」「市民社會」論が盛んだったこともあり、楊韜氏は『生活』投書欄にユルゲン・ハバーマスの「公共圈」を見いだされていたが、評者は葉文心の研究成果などを紹介しつつ、投書欄はコミュニティとは言えてもそれが「公共圈」とまで言えるかどうかは疑問であると、批判的なコメントをした記憶がある。本書で楊韜氏の議論に久しぶりにふれると、すでにユルゲン・ハバーマスの「公共圈」の適用は放棄されており、その代わりにベネディクト・アンダーソンの「想像の共同體」が參照されて、さらに洗練された見事な結論が示されており、私も初めて『生活』投書欄の特性をよく理解することができたのである。そして、楊韜氏が日本の學界で活躍されるなかで實力をつけてこられた成長の過程も知ることができた。

ところで、實は評者も以前から鄒韜奮に興味があった。大學院博士課程に在籍中の二〇〇〇年、上海社會史を研究するために留學し、上海のマンションを借りた。そのとき、若い女性の大家さんに中國の歷史を研究していると言うと、「一

番尊敬している人物は誰か」と聞かれたので、私はとっさに鄒韜奮だと答えたところ、大家さんは彼を知らなかったのだろうか、キョトンとしていたのを今でも覺えている。私は近代都市における新中間層の形成という少し社會學的なテーマに沒頭し、その後、鄒韜奮に對する理解を深めることはなかったが、本書のような良書に接し、そういえば鄒韜奮や生活書店を博士論文研究とする道もあったのかなと、今更ながら氣づかされた次第である。

しかし、當然ながら楊韜氏と私とでは關心が異なる點もあるので、最後に無い物ねだりをして、評者としての役目を果たしたい。というのは、大學院生時代の私が鄒韜奮や彼の編集する雜誌『生活』に惹かれていたのは、それが市民的公共性あるいはナショナリズムの擔い手であったからではなく、その平易かつ鋭い語り口が魅力的だったからである。『生活』は、民國期上海の人々の現實・實態を反映した聲にあふれており、そこからは都市民の本音を聞き取れるように思えていた。鄒韜奮は、英語ができ國際感覺もあって歐米流の考え方も知りながら、中國民衆が共感できる論壇を開いていたので、私のような外國人歷史研究者にとってはとても貴重でありがたい存在であった。こうした關心の評者から見れば、楊韜氏は知識人研究の對象として鄒韜奮を論じるので、鄒の思想的背景などを明らかにした反面、鄒が向き合っていた上海社會、ないしは鄒と上海社會との相互關係を考察するという點では若干の物足りなさを感じる。鄒韜奮がジャーナリストとして向き合っていた上海の大衆社會がどのように變わりつつあったのか、例えば「市民社會」の萌芽は見られていたのか、あるいは民衆レベルでも「左傾化」が進んでいたのかといった問題に論及したうえで、中國社會におけるジャーナリストの役割の變化を考察すれば、さらに議論を深めることができたようにも思える。

さらに、本書の研究は、楊韜氏が二〇〇七年に名古屋大學に提出された修士論文「ジャーナリスト鄒韜奮の發展―公共圈をめぐる彼の思想と活動」が出發點になっている。おそらく楊韜氏は、もともと公共圈および西洋思想の受容を鄒韜奮と生活書店に見いだそうとしていたが、後にナショナリズムとの關わりを考察する方向に議論を轉換していったのだと考えられる。もちろん、近代中國のジャーナリスト・ジャーナリズムは、市民的公共性の觀點からでは論じきることができ

ないだろう。しかし、確かに公共性というよりは共同性に近いナショナリズムの影響が強力ではあるものの、ジャーナリスト・ジャーナリズムがすべてナショナリズムに收斂してしまったということもできず、むしろナショナリズムに集約されない一面に着目することが課題であるともいえる。中國において鄒韜奮は「抗日英烈」「愛國主義政論家」と評されることもあるが、鄒韜奮のジャーナリストとしての眞骨頂は、いわゆる愛國主義者とはちがった一面にあるように思えるのだ。

その兆候は、本書の隨所からも拾い集めることができる。例えば、鄒韜奮の親友・畢雲程によれば、鄒の死後に「（韜奮）先生は政治を專門とする研究者ではないが、四方八方からのさまざまな青年讀者からの情熱的な手紙は、彼が政治を研究しなくてはすまないように迫った」という（一八二～一八三頁）。鄒韜奮にとって愛國主義とは必要に迫られて唱えるものであり、けっして第一に優先すべきものではなかったようである。滿洲事變によって抗日意識が高まる一九三三年においても、『生活』の投書欄では「戀愛と貞操」論爭が展開され、鄒韜奮はこの問題を「民族社會意識を高める方法の一つ」と主張するが、楊韜氏はこれを「理解し難い發言として感じざるを得ない」として、なぜこの時期にこんな論爭が起こされたのかと疑問を呈している（二〇二頁）。どうやら愛國主義は、鄒韜奮にとっても多くの民衆の場合と同じく、しばしば第一義的なものではなく、何か別の目的を達成するために用いられる二義的なものであったと考えられそうである。また、本書は『生活』投書欄における「國貨」をめぐる言說を分析して、讀者の「國貨」に對する關心はけっして高くなく、メディアの「國貨」運動に市民が必ずしも感化されていたわけではないと結論づけている（二四四頁）。一九三〇年代の『生活』投書欄における「戀愛と貞操」や「國貨」をめぐる言說から明らかになっているのは、「ナショナリズムの複雜性・多樣性」（二四六頁）というよりも、鄒韜奮と生活書店のナショナリズムに集約されないある意味で「自由」な一面と考えることができるだろう。

楊韜氏は、鄒韜奮を國民黨でも共產黨でもない中間の「第三勢力」の知識人として位置づけているが、さらに一歩進ん

でリベラリスト（自由主義者）の系譜に位置づけ、近代中國のリベラリズムを論じ直すこともできたのではなかろうか。本書でも、日本の壓力を受けた國民政府の言論彈壓である新生事件が取り上げられており、また一九三八～四一年に國民參政員となった鄒韜奮が言論出版の自由をめぐって平和的手段で鬪っていたことが注目されている。ほかにも本書の附錄Ⅰでは、一九三六年に鄒韜奮が沈鈞儒・章乃器・陶行知と聯名で『生活』に發表した「團結して侵略に抵抗するいくつかの基本條件と最低限要求」という聲明の原文が收錄されている。そこでは「われわれが聯合戰線を主張するのは、抗日救國という大事業が決して、どこかの黨派、どこかの方面が單獨で成し遂げられるものではないと信じるからなのである」、「われわれが言論の自由を要求し、集會結社の自由を要求するのも、みなが中國人であり、共同抗日の立場にあるのだから、必ず互いに寛容で、互いに自由に意見を發表しあい、自由に團體を結成することが許されなければならないからである」（本書二六二頁。譯文は『新編原典中國近代思想史　第五卷』の小野寺史郎・中村元哉譯を參照）などと表明されており、戰時のリベラリズムを見出せる。これらを手がかりとして繫ぎ合わせれば、鄒韜奮と生活書店は、そこに近代中國における「メディアとナショナリズムの交錯」（一六五頁）を見るよりも、メディアとリベラリズムの關わりやその特性・限界を見ることによって、より積極的に評價できるのではないかと思われる。

鄒韜奮が言論の自由、さらには個人生活の自由を追求したリベラリストであったと考えるならば、彼がナショナリストとして振る舞い、そして共產黨に接近していったのは、それらにこそ現實的に自由を追求する可能性を見いだせたからであったという、本書とは少しちがった鄒韜奮とその時代のストーリーを描き出せるかもしれない。本書は、そんな稚拙な構想も廣げながら興味深く勉强させていただいた一冊である。

二〇一五年一一月　東京　汲古書院
二二糎　五＋三三〇頁　九〇〇〇圓＋稅